

# インタビュー調査の技法

—— 現象学的社会学の具体的応用 ——

The Technique of a qualitative interview method

—— practical application of Phenomenological sociology ——

近 藤 敏 夫

## 要 旨

質的社会調査は対象者の意味世界のデータを第一次資料として収集し、それを解釈し分析することを目的とする。現象学的社会学では、対象者の意味世界は対象者自身によって一次的に構成されており、その一次的意味構成に基づいて社会学者が二次的に意味を構成するものと考えられる。インタビュー調査では調査者の質問に対象者が答える形態をとるため、調査者が対象者の一次的意味構成に影響を与えることになる。そのため、調査者の主観を適切にコントロールして対象者から語りを聴き出す必要がある。また、インタビュー後に録音をトランスクリプションするときも、対象者の一次的意味構成を損なわないように調査者の主観をコントロールする必要がある。最後に、テープ起こしされたトランスクリプトに基づいて対象者の一次的意味構成を要約して示す際も、調査者の主観を適切にコントロールする必要がある。

キーワード：インタビュー調査、現象学的社会学、一次的意味構成、レリヴェンス

## はじめに —— 問題の限定

インタビュー調査は質的研究の一つであり、質的研究の理論はA. シュッツの現象学的社会学がその古典とされる。ところが、実際のインタビュー調査でシュッツの理論が応用されているのか不明なことが多く、すぐれた調査研究も調査者の個人芸に依存してきたきらいがある。その原因は、もともとシュッツの理論が日常の人々や研究者が無自覚のうちに実施している意味構成を哲学的に厳密に基礎づけるものだったからであろう。つまり研究者もしくは調査者はシュッツの理論を知らなくても、M. ウェーバーのように、すぐれた質的研究を行うことは可能である。

シュッツの唯一の自著が『社会的世界の意味構成—理解社会学入門』（Schütz, Alfred [1932] 2004）と題されているように、彼はM. ウェーバーの動機理解の社会学を哲学的に基礎づけている。ウェーバーのような理念型構成が他の社会学者にもできるとは限らない。シュッツはウェーバーの理念型構成の根本を哲学的に問い直し、理念型構成の仕組みを解き明かしたといえる。本稿ではシュッツの理論が質的社会調査にも応用できると考える。これまで質的社会調査には調査者のセンスが不可欠であるとされてきたように思う。対象者や状況の違いに応じて、それぞれの調査にはそれぞれふさわしいやり方があるからである。しかし、調査者の個人芸やセンスの良し悪しに依存するのではなく、社会調査の初心者が調査の技法を学ぶことはできないだ

ろうか。

今日、質的社会調査を実施しようとする者はシュッツの原典を読まないまでも、シュッツの解説書程度の知識はあるだろう。本稿はインタビュー調査をシュッツの理論で基礎づけることによって、調査者が自覚的に質的社会調査の技法を学ぶための手引きとしたい。

質的研究は対象者の主観的な意味世界を明らかにすることを目的とする。社会学は対象者の一次的意味構成を明らかにし、それを第一次資料として研究者の学問的視点から二次の意味構成をする。ここで「一次的意味構成」とは対象者が自分の主観に基づいて意味を構成していることを指す。例えば、調査者や研究者が社会学の分析枠組から類型概念を構成する以前に、対象者は日常生活ですでに類型を構成している。このことを強調するため、対象者による意味構成を「一次的意味構成」とし、調査者や研究者の学問的視点からする「二次の意味構成」と区別した<sup>1)</sup>。

しかし、対象者本人は自らの意味構成について自覚的でないことが多い。質的社会調査は対象者の一次的意味構成を明らかにするための手段になる。質的社会調査の作業の範囲は、対象者の主観的な意味世界のデータを収集し、その意味世界でなされている一次的意味構成を明示的に示すことである。他方、調査者や研究者の二次の意味構成とは、社会調査で得た知見を基にしながらも、さらに他の先行研究などと比較しながら対象者とは別の視点で意味構成を行うことである。本稿では、質的社会調査の技法を対象者の一次的意味構成を示す段階までに限定して考察することにする。

ここで質的社会調査のデータを、(1)日記や手紙などのように調査以前に対象者が既に記述していた個人的記録と、(2)インタビュー調査や参与観察のように対象者と調査者の相互行為が介在して得られるフィールド・データに分けておこう。前者の日記や手紙は対象者自身の関心か

ら記述されたものであり、調査者の影響を受けずに対象者の一次的意味構成がテキストとして示されている。これに対して、後者のインタビュー調査や参与観察では調査者が対象者に影響を与えるため、対象者の一次的意味構成には調査者の主観が反映されることになる。また、フィールド・データが文字ではなく語りや行為であるため、調査後に調査者がその語りや行為を文字に変換して第一次資料にする。そのため、データの変換時に調査者の主観が反映される。したがって、質的社会調査では調査者の主観や視点を適切にコントロールすることが求められる。

以下、対象者の一次的意味構成を明らかにするためのインタビュー調査の技法について検討する。留意すべきことは調査者の主観のコントロールである。ただし、インタビュー調査と一口に言っても様々な形態がある。インタビュー調査と参与観察が混在することもある。本稿が想定するインタビュー調査とは、初対面の第三者を対象者とし、1時間から2時間程度の半構造化インタビューを行い、事後にテープ起こしをするというものである。

なお、二次の意味構成については、インタビュー調査の範囲を超える検討課題があるため、本稿では必要な限りにおいて言及するにとどめる。

## 1. インタビュー時の留意点

### — 対象者のレリヴァンスに与える 調査者の影響

一次的意味構成は対象者の主観に基づくが、その主観はレリヴァンスのあり方に依存する。シュッツに従えば、以下に述べるトピック的レリヴァンス、動機的レリヴァンス、解釈的レリヴァンスが相互に関連しながら、主観は意味構成を行う<sup>2)</sup>。インタビュー調査では、対象者のレリヴァンスに留意しながら、対象者から語りを引き出し、その語りの意味を聴き取る必要がある。

### 1. 1 トピック的レリヴァンス

対象者の主観を解釈する場合、まず対象者が何に関心を向けているかを知ることが大切である。シュッツのトピック的レリヴァンスにかかわる問題である。ところが社会調査では、調査者の関心からトピックが設定され、対象者がそれに答えることが多い。「いつ、どこで、誰が、何を、どのように」したかという質問はトピックとして調査者によって設定される。このように調査者の関心が対象者に影響を与えて、対象者のトピック的レリヴァンスが選択される。とくに量的な質問紙調査（いわゆるアンケート調査）では質問項目が細部にわたって決められている。これに対して、インタビュー調査では調査者が調査中にトピックをさらに深めたり変更したりすることができる。

社会調査の意義のひとつは、対象者がトピックとして意識していないことを調査者の質問によって引き出すことである。ゲシュタルトの図と地の関係に喩えていうなら、あるトピックが「図」として関心の対象になるなら、その関心の背景には「地」として意識されないことが存在する<sup>3)</sup>。社会調査では調査者が対象者のゲシュタルトの図と地の関係を反転させることになる。社会調査によって対象者がそれまで明示的に意識していなかったことが意識化されるのである。インタビュー調査の利点は、調査中に有意義なトピックを「図」として浮かび上がらせることができることである。

インタビュー調査の代表的なものとして半構造化インタビューの形式がある。これは質問項目をおおまかに設定しておき、細部に関しては自由度を高くしておく形式である。調査者が語りのきっかけとなるトピックを設定し、語りの中身については対象者がトピックを選定するようにする。また、質問の順番も、対象者の語りに合わせて変更することがある。対象者は調査者が用意した質問の順番通りに語ってくれるとは限らない。実際のインタビューでは対話の流

れを乱さないように、対象者の関心に合わせて質問の順番を変えることもある。いったん調査者が語りのきっかけを作った後は、対象者の関心に沿って対象者が「図」としたトピックについて語ってもらうのである。

### 1. 2 解釈的レリヴァンス

対象者は調査者との関係でトピック的レリヴァンスを選択する。それゆえ、調査者は対象者の関心となりえる事柄を事前に調べておく必要がある。トピックは対象者の経験に蓄えられてきた「知識の在庫 (stock of knowledge)」に基づき認識される。また、同時にその知識在庫に基づいて対象者はトピックに解釈を加えて、調査者に語ってくれる。あるトピックをトピックとして認識できるか、また、そのトピックをどのようにして解釈するかという問題、つまり解釈的レリヴァンスは知識在庫にある類型に基づいている。したがって、調査者は対象者の知識在庫を事前に調べた上で質問項目を作成しておく必要がある。

半構造化インタビューで用意する質問項目は対象者の知識在庫にある項目でなければならない。対象者の解釈的レリヴァンスに適合するものでなければ対象者から語りを引き出すことができないからである。また、半構造化インタビューでは事前に大まかな質問項目が準備されているわけであるが、対象者が答えに窮したときに調査者が答えのきっかけを与えることが必要なときもある。臨機応変に対象者の知識在庫に適合した尋ね方をしなければならない。さらに、インタビュー調査の特徴の1つは、対象者が調査者の想定していなかったトピックについて語ることである。それゆえ、対象者の関心に合わせてトピックを深めたり変更したりすることが大切である。想定外のトピックに対応するためにも、対象者の知識在庫について事前に調べておくことが望ましい。

調査者が対象者の解釈的レリヴァンスをある

程度共有していないと、インタビューにおける対話が成立しないこともありえる。具体的には、対象者の属性（世代、性別、地域、階層など）に応じた言葉の使い方や共有された経験などを、事前に各種関連資料（歴史資料、官公庁の統計資料、新聞記事、小説や映画、対象者以外のインフォーマントの語りなど）で調べておくとうい。

### 1. 3 インタビュー時における調査者の主観のコントロール

調査者は何よりも聴き上手にならなければならない。インタビュー調査は対象者との対話で成立している。日常的な尋ね方ではいわゆる5W1Hを明確にするという留意点がある。これは社会調査にもあてはまる。5W1Hのなかでも、「いつ、どこで、誰と、何を、どのように」したか（「なぜ」については後述）に留意して簡潔な尋ね方を心がけ、対象者の語りを促すのがよい。

調査中に対象者の語りを理解できないときや不明な点があるとき、再度尋ね直しをすることがある。その際の尋ね方の基本も対象者自身の語りを促すことである。調査者が語りを要約したり補足したりして、対象者に同意を求めるような問い方は避けるべきである。インタビューの最中に理解できないこと、確認したいことがある場合は、なるべく対象者に再度、同一のトピックについて語らせるようにする。問い直されると対象者はトピックの内容を要約、整理してくれることがある。問い直しには一次的意味構成を確認する働きがあるが、その際、調査者の方で語りを要約したり不足部分を補ったりすると、対象者の一次的意味構成を損ねる危険性がある。

調査者の主観をコントロールする初歩的かつ基本的な方法は、調査者自身なるべく話さないようにすることである。対象者の語りに同意するときや、対象者の語りを促すときも、目や

顔の表情、うなずき等で合図を送る心構えが必要である。

筆者はインタビュー調査ですぐれた成果を上げてきた研究者のインタビュー録音を拝聴する機会があったが、その録音のほとんどが対象者の語りで占められていた。それとは対照的に、調査の初心者も多くを語りすぎるきらいがある。1時間から2時間の半構造化インタビューを想定する場合、その限られた時間内にいかに多くを対象者に語ってもらうかが大切である。調査者自身が対象者の語りを要約したり補足したり、また調査者の経験に照らし合わせて同意したりすること（日常会話の尋ね方）は極力避けるべきである<sup>4)</sup>。

### 1. 4 動機的レリヴァンス

インタビュー調査の目的のひとつは対象者の「動機理解」である。「なぜ」という質問に対象者がどのように答えるかが問題となる。「いつ、どこで、誰が、何を、どのように」したかは客観的に事実確認をすることができる。例えば、新聞などの資料で確認したり、他のインフォーマントに確認したりすればよい。これに対して、対象者の動機はきわめて主観的であるため事実確認をすることが難しい。

動機についての語りは、対象者と調査者との関係によって語られ方が違ってくる。対象者がある行為の動機を語る場合、調査者に理解しやすいように話を合わせてくれたり、その逆に、自分の動機が理解されないように故意に話を逸らせたりすることもある。対象者本人にとってどんな動機が重要であるかは、調査時点で対象者が調査者との関係でその都度選択するものと考えられる。

シュッツによれば動機は理由動機と目的動機の2つに分けられる。理由動機が過去からの理由付け、目的動機が未来の目的に方向づけられている。この方向づけは内的時間意識に沿って行為を意味づけること、すなわち一次的意味構

成の根本になる。対象者本人の動機は内的時間意識によって主観的に意味づけされたものであるため、原理的に対象者以外から収集した資料で客観的に事実確認することができない<sup>5)</sup>。動機についての質問は、対象者の主観的意味づけを知るために重要であるが、信頼性を期待しない方が無難である。

しかし、冒頭に述べたようにシュッツは動機理解の社会学を基礎づけており、今日の質的研究はウェーバーとシュッツを古典としているといつてよい。問題は、社会学の動機理解が対象者本人の動機を直接理解することを意味していないということである。ウェーバーにしるシュッツにしる、特定個人の動機を直接理解することを社会学の課題にしていない。理念型的もしくは類型的に動機を理解することが重要であるため、社会学者は特定の対象者の主観に感情移入して動機を直接理解する必要がないのである。

社会学ではインタビュー調査の対象者が1名のみであっても、その個人の語りのデータに基づいて「理念型」や「類型」を構成して動機理解を行う。例えばライフ・ヒストリーのインタビュー調査にみられるように、調査後に対象者の生活の時間の流れに沿ってトピックの語りを位置づけて、対象者の理由動機や目的動機を合理的に推測するのである。それゆえ、調査者が推測した動機は対象者本人が直接意識している動機とは必ずしも一致しない。しかし、このような類型的な動機理解が特定の対象者を越えて一般的に妥当することが社会学にとっては重要である。調査者が推測する類型的な動機は、対象者と属性を共にする者が持ちえる動機であって、対象者本人にとっては「地」として意識されないままの状態であることが多い。

インタビュー調査で対象者に動機についての語りを促すことは強いて必要ではない。動機についての語りがあったとしても、その語りを基にして推測した類型的な動機が対象者の語った動機と一致しているとは限らない。なお、対象

者本人の動機的レリヴァンスと類型的な動機との関係はさらなる理論的考察を要する問題である。

## 1. 5 インタビューの状況

対象者が何をトピックして語るか、またどんな風に動機について語るかは、対象者と調査者の関係だけでなく、インタビューがなされる状況にも依存する。ここでインタビューの状況には、インタビューの対話に含まれる内的な状況（笑い、沈黙、相槌、敬語の使い方、etc.）と、インタビューが設定される外的な状況（時間、場所、立場、地位、etc.）とがある。インタビューも対話の一形式であるから、対話に含まれる内的な状況が対象者の語りを促すこともあれば、その逆もある。対象者との関係に応じた尋ね方をしなければならない。礼儀をわきまえたり、打ち解けた尋ね方をしたり、臨機応変に対応しなければならない（ただし、この点に関しては現象学的社会学に基づいて具体的な技法を示すことはできない）。

またインタビューの外的な状況も語りの内容に影響を与える。例えば、いわゆる非行少年にインタビューする際に、午前10時に少年鑑別所の一室で研究者としてインタビューする場合と、深夜の街角で暴走族に面白そうなおじさんとして知り合った場合とでは、対象者のトピックや動機についての語り方に違いが出てくる<sup>6)</sup>。インタビューの外的状況は録音することができないため、調査中もしくは調査後にフィールド・ノートにインタビューの外的状況を記録しておく必要がある。

## 2. インタビュー記録の作成

インタビュー記録はインタビュー録音とフィールド・ノートに基づいて作成する。インタビュー記録は対象者の一次的意味構成が示されている第一次資料である。この第一次資料は報告書や

論文に使える形式で保存しておくことが大切である。そこで一番重要なのは、インタビュー録音を文字のテキストに変換することである。

## 2. 1 インタビュー録音を繰り返し

### 参照することの重要性

インタビュー録音を逐語的にトランスクリプション（テープ起こし）し、それを文章に書き記したものがトランスクリプトである。このトランスクリプトにインタビューの日時や場所、調査者や対象者の情報を加えて若干の編集を加えたものがインタビュー記録である。通常、報告書や論文の資料として利用されるのは、このインタビュー記録である。ただし、一旦作成されたインタビュー記録に頼り過ぎるのは危険である。トランスクリプションの際に、聴き間違いや聴き逃しがありえる。また、声の調子や抑揚など、文字化しにくい情報に意味があることもある。インタビュー記録を利用するとき、何か疑問が生じたら、インタビュー録音に戻って確認することが大切である。最近はいくつかのレコーダーで録音することが多いが、録音ファイルは原資料として保存しておく。インタビュー録音を聴き直すことが、対象者の関心の変化やトピック的レリヴァンスの転換に気づかせてくれるからである。

報告書や論文の執筆では、インタビュー記録を十二分に活用し、いわゆる「分厚い記述」をしなければならない<sup>7)</sup>。せっかく良いインタビューができて、インタビュー記録を上手く利用することができなければ分厚い記述は望めない。そこで利用しやすいインタビュー記録を作成しておく必要がある。ただし、研究スタイルによって、トランスクリプションの厳密さやインタビュー記録の編集方法は違ってくる。

次節では、まず厳密なトランスクリプションとして会話分析のスタイルについて紹介し、つぎにライフ・ヒストリー調査でなされるトランスクリプションについて紹介する。

## 2. 2 厳密なトランスクリプション

最も厳密なトランスクリプションとして、会話分析のスタイルを取り入れたものがある。インタビューは調査者と対象者の共同作業で進行するが、調査者の関心によってインタビューが方向づけられることが多い。対象者は調査者との関係で、自分の経験を新たに意味づけ、脚色し、創作すると考えられる。そのため、調査者と対象者の相互行為の産物としてインタビュー記録を分析する必要がある。分析の対象は、対象者の語りの内容だけでなく、語りが生じたインタビューの状況にも向けられる。

会話分析のスタイルを取り入れるなら、インタビューの状況が判別可能なトランスクリプションをする必要がある。インタビューの状況には、インタビューのセッティングなどの外的状況と、語りの中に現れる内的状況がある。外的状況は、語りそのものではないが、いつ、どこで、誰が誰に、どんな状況でインタビューしているかをフィールド・ノートに書き留めておく。これらの情報は語りの背景としてインタビュー記録のト書きにする。

また、内的状況として、インタビューの語りには、相槌を打ったり、話に割り込んだり、笑いがあったり、お互いに沈黙し合ったり、同時に話したりなど、そのままでは文字化しにくい相互行為が伴っている。例えば、「へー」とか「あー」の抑揚の長さやトーンの高低に意味が込められたり、それによって語りが方向付けられたりすることがある。「へー」と一本調子で言う場合と、「へーへー」と尻上がりにトーンを高める場合とでは、相槌の意味の込め方に違いがある。沈黙の長短にも意味の違いがある。このような文字化しにくい情報は、文字の表記法や各種記号の使い方に約束事を作ってトランスクリプションする<sup>8)</sup>。会話分析のスタイルは、インタビュー録音（対象者と調査者の発話）をできるかぎり厳密にトランスクリプションして、語りの内容とともにインタビュー

の状況をも文字や記号で書き記す方法である。

## 2. 3 ライフ・ヒストリー研究の

### トランスクリプション

一般のインタビュー調査では会話分析のように厳密なトランスクリプションをすることはあまりない。ライフ・ヒストリー調査を例に取り上げるなら、その目的は対象者の語りの内容に解釈を加えて分析することである。調査者と対象者の相互行為の状況は分析の対象に通常はならない。インタビューの状況を示す、「へー」や「あー」、声の抑揚やトーンの高低、沈黙の長短、笑いなどは、トランスクリプションの際に省略されることが多い。インタビューの内的状況が事細かに表記されると、語りの内容や話の筋が把握しづらくなるからである。ただし、インタビューの状況を示す情報が重要であると判断される場合は、インタビュー記録に表記される。例えば、筆者が参加したことのある在日韓国・朝鮮人のインタビュー調査では、以下のようなト書きを挿入してある<sup>9)</sup>。

ほんで今度また朝鮮のなかにいくと、  
あぁあの子は日本の子やなってるし、  
もうその辛さ、(テーブルをたたく)  
もうわたし分かるわ、もうなんという  
嫌な・・

インタビューの最中に対象者がテーブルを叩いたという情報は、対象者の心情や関心を知るための手がかりになる。

どのような情報をどの程度まで表記するかは、トランスクリプションの際に適宜判断される。また、トランスクリプションの際に、句読点の位置をどこにするか、段落をどこに付けるかなどで迷うことがある。通常の話し言葉では、語りの途中で話が途切れたり、別の話が割り込んだりするからである。これは対象者の語りが時間の流れに沿って複数のトピックが錯綜し平行

して語られることを示している。ところが、書き言葉の文章ではトピックに意味のまとまりをつけて一貫させることが多い。そのため、インタビューの話し言葉を文章言葉に書き換える際に無意識にトピックを一貫させることがある。筆者の経験では、調査の初心者のトランスクリプトは意味がまとまっている。これはトランスクリプションの際に分かりやすい文章に書き換えているためであろう。しかし、インタビュー記録を第一次資料とする場合は、意味にまとまりがとれていなくても、対象者の語りの流れに沿って忠実にトランスクリプションをするのが望ましい。

実際のトランスクリプションの作業は、下書きの段階と清書の段階に分かれる。下書きの段階のトランスクリプションでは、「あー」や「へー」、その他のインタビューの状況を示す情報(例えば、「テーブルを叩く」、「電話で3分20秒中断する」などの情報)がト書きで記載され、また句読点の位置や段落の付け方も、語りの間合いや沈黙の長さによって決められることが多い。したがって、そのままでは意味のまとまりのある文章として読みづらい。下書きを何度か書き直して意味の通った文章にする必要がある。下書きの段階では話し言葉の要素が多く残っているが、何度も書き直すことによって書き言葉として読みやすい文章になる。ここで注意しなければならないのは、対象者の複定立的な語りを調査者の視点から単定立的な文章にまとめてしまう危険性である。トランスクリプションは、話し言葉を書き言葉の文章に変換する作業であるが、変換する際に調査者の主観による編集作業が加わることになる。

## 2. 4 インタビュー記録の編集

話し言葉から書き言葉へのトランスクリプションは、それ自体がいわば編集作業に相当する。対象者の語りの内容や話の筋をどの程度まで分かりやすくするかによって、インタビュー記録

の第一段階の編集（「へー」や「あー」の削除、句読点の挿入、改行など）の度合いが違ってくる。これらの編集作業は調査者の常識的な文章の書き方に依存することが多い。ただし、編集作業は調査者の視点から意味のまとまりをつけることになるため、第一次資料として残すインタビュー記録は、第一段階の編集を少なくしておくのが望ましい。

一旦作成したインタビュー記録を報告書や論文に第一次資料として引用するときも、語りを要約したり、話しの前後を入れ替えたりして、第二段階の編集を加えることがある。インタビューの流れのままでは、語りの内容が一つにまとまっていなかったり、話の前後が入れ替わったりなどして、文章として読みづらいからである。語りを引用文として例示する場合、その語りの文脈を知らない者が読んで分かる文章に編集しなければならない。しかし、語りの内容を編集することは、調査者の意味づけをインタビュー記録に付け加えることになる。インタビュー記録を第一次資料として作成する段階では、第二段階の編集を極力少なくして、インタビューの流れに沿って忠実にトランスクリプションしておく必要がある。

以下、ライフ・ヒストリー研究を想定したインタビュー記録の利用方法について説明する。したがって、語りの内容と話の筋を把握するための方法である。この方法は他の生活記録（手紙や日記など）の分析にも応用可能である。

### 3. インタビュー記録のデータベース化

インタビュー記録を十分に利用するための基本は何度も読み直すことである。読み直しによって得たアイデアを書き留めておき、インタビュー記録の解釈や分析に利用する。ここではそのための道具としてデータベースを作成する方法を紹介する。ただし、ここで紹介するデータベースは、質的データの分析をコンピュータ・ソフ

トに実行させるためのものではなく、あくまでインタビュー記録の読み直しに役立てるためのものである。原理的には紙製のカードを使ったデータベースと同じであるが、データが膨大になるとパソコンを使った方が便利であるというだけである。近年、グラウンデッド・セオリーが日本でも応用されることが多くなり、質的調査の入門書も多く書かれている。本稿でもそれらの入門書と同じくエクセルを使ってデータベースを構築する方法を紹介する。

#### 3. 1 エクセルによる

##### データベース作成の意義

インタビュー記録は、そのまま読み直しても意味を取りにくい。対象者が一つのテーマについて一貫して語るとは限らないからである。読み直しの第一の作業は語りの文脈や筋（ストーリーライン）を見つけることである。読み直すごとにインタビュー記録から多様なストーリーラインを引き出すことができる。それらのストーリーラインを書き留めておくためには、インタビュー記録のデータベースを作成しておくことが便利である。

また、データベースを蓄積していけば、対象者の語りを類型化したり、他の対象者と比較考察したりするときに便利である。同一の対象者に追跡調査をするときも、容易に過去のデータを参照することができる。ライフ・ヒストリー調査では半構造化インタビューを採用することがあるが、質問項目の大枠が決まっていれば他の調査者と共同で多くのデータを集めることができる。それらをデータベースとして蓄積していけば、類型を構成したり類型を修正したりするときに便利である。

パソコンで質的データ（文書記録のテキスト）のデータベースを作成する場合、カード式のデータベースと、エクセル形式のデータベースの2種類が使われている。カード式データベースでは、改行された前後の語りが違うページに表示



されるため、語りの文脈を見失うことがある。これに対して、エクセル形式ではインタビュー記録が分割されていても画面上では前後のパラグラフと連続して表示される。エクセルの利点はワード文書と同じように改行された語りの前後を読めることである。また、エクセルのもう一つの利点は汎用性が高いことであり、共同研究や社会調査実習で使えることである。

### 3. 2 インタビュー記録を パラグラフ単位に分割

インタビュー記録のテキストは全体としてまとまっており、前後の文脈を抜きにしては存在しえない。ある語りの意味を解釈するためには、基本的にテキスト全体を参照する必要がある。しかし、膨大なテキストをそのまま分析単位にすることは事実上、不可能である。テキストを分割してデータベースを構築することが必要である。ただし、テキストの分割単位は文節、文章、パラグラフなど、分析目的によって異なってくる。文節や文章で分割する場合は、文法規則に従って分割箇所を決めればよい。ライフ・ヒストリー研究ではパラグラフ単位に分割することが多いが、パラグラフ単位に分割する場合は、分割箇所が調査者の判断に依存する度合いが高くなる。エクセルでパラグラフ単位のデータベースを作成する手順を紹介してみよう。

エクセルでデータベースを作成するためには、インタビュー記録をセル単位に区切る必要がある。インタビュー記録の区切り方は、対象者の語りをパラグラフ単位に分割すればよい。語りの文脈や話の流れにとらわれず、1つのパラグラフに1つの意味のまとまりが入るようにしておくとう便利である。つまり、通常の話し言葉では複数のトピックが錯綜して語られるが、その語りをひとつひとつのトピックに分割するのである。

具体的な分割の仕方は、(1)半構造化インタビューの質問項目毎に区切りを入れる。1つの質問に

対して対象者が答え終わったところが区切りになる。ただし、対象者は自由に語り出すことがあるので、一問一答にならないことが多い。その場合は、(2)トピックごとに適宜パラグラフを再分割する。対象者が語りの途中で新たなトピックに移ることがあれば再度パラグラフを区切ればよい。例えば、「家族」、「仕事」、「友人」などを大まかなトピックとした質問項目の場合、インタビューの途中でトピックが入れ替わったり錯綜したりすることがある。この場合は、トピックが変わる度にパラグラフを再度区切ればよい。

### 3. 3 データベースの書式

ここでエクセルの行列の具体的な使用方法を紹介しておこう。

エクセルの表は行を並べ替えたりデータ群を抽出したりして使用する。そこで、語りの順番が復元できるようにエクセルの行に通し番号を付けておく。通し番号は対象者のID番号とエクセルの行番号を組み合わせたものがよい。

語りのセルに小見出しが付けてあれば、テーマに応じてデータを抽出するときに便利である。この小見出しは半構造化インタビューの質問項目を簡潔に表現して付けるのがよい。

エクセルの1行目には、A列「通番」、B列「語り」、C列「小見出し」という具合に、列の表題を付けるようにする。以後、インタビュー記録の分析作業はこのデータベースで行う。

表1の例は架空の調査に基づいたデータベースである。対象者は高齢糖尿病患者の長男である。患者本人に回答能力がないため、患者の長男にアナムネーゼを基に半構造化インタビューを実施している。調査対象者の3番目であるため、対象者のID番号の3番を頭にして通番を付与してある。

表1 エクセルのデータベース例

	A	B	C	D	E
1	通番	語り	小見出し	要約・メモ	コード
2	3001	対象者：田中太郎、53歳（田中花子82歳の長男）			
3	3002	調査者：鈴木京子			
4	3003	日時：2009年10月10日			
5	3004	場所：D病棟面談室			
6	3005	<お母様とは一緒に食事をなさっていますか>	共食・孤食		
7	3006	同居し始めたころは一緒に食べていましたが、今は時間帯も合わないし、糖尿食でもないの、別々に食べています。	共食・孤食	長男家族と同居（2003年12月10日）したころは共食。現在は孤食。[孤食のストレスと糖尿病との関連について先行研究を調べよ]	孤食
8	3007	<お母様のお好きな食べ物がありますか>	食事の好み		
9	3008	お菓子が好きです。	食事の好み		
10	3009	近所の友達の家で集まって食べていたようです。糖尿病の治療は受けていたのですが、、、。後で母親の友達に来てそう言っていました。家では食事療法をしてました。血糖値が下がらないので不思議に思っていたら、やっぱり隠れて食べていたようです（笑い）。	食事の好み	自宅で糖尿病の食事療法中に友人宅でお菓子を食べている。家族に隠している。[山崎他（2005）の類型参照]	現実逃避型
11	3010	<お母様はいつ頃から糖尿病になりましたか。>	既往歴（糖尿病）		
12	3011	三十年前くらいだと思いますが、私が実家にいなかったの、詳しいことは分かりません。	既往歴（糖尿病）	1980年頃から糖尿病。当時は長男と別居。	
13	3012	いくつか病院を代わったようですが、私が知っているのはA市のB病院です。その時は私が車で送ってましたから。<それはいつですか>えーと、私がこっちに帰ってきたころだから、平成3年ですね。	既往歴（糖尿病）	1991年からB病院に長男の自家用車で通院 [同居開始は2003年12月10日]	長男の支援

出典：藤田和夫編著『これならできる看護研究』照林社、2007、p.50、図6を修正

4. データベースの構築

4. 1 要約作業 ― 大筋を把握する ―

語りの分析作業は、語りの大筋を把握することから始まる。まずは、インタビュー記録を読んで、セル単位に要約する（表1 D列）。要約には要約の視点が必要になる。半構造化インタ

ビューでは、列の小見出しにつけた項目をトピックとして要約する。しかし、対象者はインタビューの流れで質問項目には無かったトピックに移ることがある。そのトピックも重要であるためメモに記して大筋を作る際に考慮する（例えば表1 D列10行目の「友人宅でお菓子を食べている」）。

注意しなければならないのは、調査者の関心

から語りの大筋を作ることと、対象者の関心から語りに筋をもたせることとは次元が異なるという点である。要約には調査デザインに沿った要約と対象者の関心に沿った要約の2つがある。まずはインタビューの大筋を半構造化インタビューの項目に沿って調査者の視点から大筋を付けて整理しておくのが便利である。半構造化インタビューでは基本的に調査者の用意したトピックの順番でインタビューが進行すると考えられるからである。

ただし、すべての語りに要約を記入するのは多くの時間を要する。実際には調査者が重要だと思った語りを要約する。報告書や論文に引用したい語りに目星を付けておき、その語りに要約とメモ書きを付ければよい。メモ書きには参照すべき先行研究や検討課題などを記入しておく（表1 D列の例では、メモ書きは[ ]に記入している）。メモ書きには対象者の解釈的レリヴァンスを知るための情報や、調査者が社会学の観点から二次的意味構成をする際に必要となる情報（先行研究）なども記入しておく。

#### 4. 2 コーディング作業

質的データのコーディングは類型構成に役立つ。類型には対象者の一次的意味構成によるものと、調査者の二次的意味構成によるものがある。第一段階のコーディングでは対象者自身の言葉もしくはそれに近い表現でキーワードを付けるのがよい。一次的意味構成の類型概念を引き出すためである。

第二段階のコーディングでは社会学の視点から専門用語や分析概念を用いる。新しい専門用語や分析概念をつくるのは難しいため、実際には先行概念を使うか、先行概念を修正して使うことが多い。その利点は他の社会学の研究と比較できることである。ただしグラウンデッド・セオリーでは、先行概念を借用するのではなく、データに基づいて抽象概念（軸足コード）を引き出し、新たな理論をデータから構築すること

を提唱している。これを現象学的社会学の発想で言い換えるなら、対象者の一次的意味構成の類型概念に基づいて研究者が二次的に類型概念を構成するということになる。

コードはすべての語りに付ける必要はない。しかし、重要だと思われる語りには、対象者が語った言葉を基にして日常語に近い概念でまずはコーディングしておくのがよい（表1 E列では「長男の支援」が日常の類型に近いコード）。また、インタビュー記録を解釈し、分析するためには抽象的な概念が必要になる。例えば、患者のタイプをどのような類型に分けるか、患者と家族の関係をどのような類型に分けるか、このような問題が出てくる。表1 E列では患者のタイプが「現実逃避型」、患者と家族の関係が「長男支援」と「孤食」のコードにしてある。

類型概念は対象者の語りから引き出すことが理想とされる。しかし、調査の初心者が独力で新しい概念を引き出すことは困難である。そこで、研究領域でよく使われている用語や、先行研究の分析概念を用いてコーディングすることになる。例えば、先行研究を調べて、高齢の糖尿病患者に「現実逃避型」、「あきらめ型」、「前向き型」などの類型があることが分かれば、それらの類型が当てはまる語りにコードとして付けていく（表1 E列）。

#### 4. 3 データベースの活用方法

質的社会調査の作業の最終段階は、語りの文脈や筋、すなわちストーリーラインを把握することである。インタビュー調査の目的の一つは、対象者の個性的な生活を報告書や論文に書いて他の人に紹介することである。

インタビューの対象者は質問に沿って語ることもあれば、途中で脱線することもある。また、この脱線が対象者本人の関心を表わすものであるから、質的調査ではデータとしての意味をもつことがある。対象者は複数の関心をもち、語りの最中にそれらの関心が入れ替わることが

ある。その多様に錯綜した関心を解きほぐしながら対象者の一次的意味構成を引き出す作業が必要である。つまり、多様に錯綜した語りのトピックを解きほぐして、ストーリーラインを作成するのである。そのためには、語りの順序を入れ替えて、語りを要約する作業が必要になる。具体的には、表1 B列の「小見出し」で同一の語りの行を集め、その「要約・メモ」欄に基づいて、いつ、どこで、だれが、何を、どのようにしたかが分かるようにストーリーラインを作っていけばよい。

調査では、対象者本人のインタビューだけでなく、対象者の家族史、統計資料、歴史資料、他のインフォーマントへのインタビューなどのデータを入手することがよくある。それらの資料で事実確認をすると同時に、対象者の解釈的レリヴァンスに基づいた信頼性の高いストーリーラインを作るためである。それらの情報は語りを解釈するときに重要である。対象者は自分にとって当然のことは語らないし、相手に言う必要のないことも語らない。それらの語られなかったことも、語りの内的地平の一つ、つまり対象者本人の「知識在庫」には含まれているからである。

ストーリーラインの提示では、インタビューの内的文脈に沿って動機理解を加えることが必要である。ある語りはその前後の語りとの内的な文脈をもっている。語られる出来事を時間の流れに位置づけて、合理的に動機を推測するのである。内的文脈に沿ったストーリーラインの把握は固定されたものではなく、筋の付け方が常に再構成可能なものである。この再構成、つまり動機（目的や理由）の見直しは、対象者の一次的意味構成のレベルで日常的に行われている。実際の語りでも、目的や理由が語りの途中で言い換えられたり、話の前後が違ったりすることがある。必ずしも首尾一貫していない語りを基にして、調査者は対象者の理由動機や目的動機を合理的に推測し、類型的な動機理解をストー

リーラインに加えることが大切である。

ストーリーラインを作成した後は、テーマ別にインタビュー記録を要約する必要がある。報告書や論文では先行研究を参考にしながら、調査で得た知見を示すことが求められる。その第一は対象者の類型を作成するという課題である。具体的には、エクセルのフィルタ機能を使って、表1 E列のコードに応じて語りのデータ群を抽出し、コードに応じた特徴をまとめていく。それぞれのコードに応じて特徴をまとめていき、関連したコードで複数の類型に分ければよい。ただし、この作業は研究者による二次的意味構成の段階である。先に述べた類型的な動機理解も理論的には研究者の二次的意味構成に属する。ただし、二次的意味構成については、インタビュー調査を超える問題が含まれるため、今後の検討課題とする。

付記：本稿は平成19年度佛教大学特別研究費の成果発表である。

#### 注

- 1) 佐藤による「意味の第1階梯」、「意味の第2階梯」とほぼ同様のネーミングである（佐藤，2004：56）。
- 2) シュッツのレリヴァンス論には次元の異なる問題系がある（片桐，1993：62）。初期ではレリヴァンスが社会科学認識論の文脈で論じられた。中後期では行為者の認識の問題系として論じられ、日常的な行為主体が適切な類型を用いて現実を作り上げていく作業そのものが、レリヴァンスの問題とされた（矢田部，2000）。本稿ではレリヴァンスを日常の行為主体の認識問題の問題系とみなすことにする。
- 3) レリヴァンス論とゲシュタルト心理学との関係についてはシュッツとアーロン・グールヴィッチの往復書簡を参照（Grathoff, 1985）。
- 4) インタビュー調査と参与観察が融合した形態の場合は、日常会話の尋ね方が有効なこともある。尋ね方は対象者との関係に依存する。対象者との関係が継続し、深まってくると、対象者のレリヴァンスを共有する（パースペクティブの相互性）ことが容易になるためである。対象者との付き合いが深まると、日常会話の尋ね方をする方が適切なこともある。

- 5) もしも動機についての語りが正しいかどうか確認できる手段があるとするなら、それは感情移入や内観による方法であろう。だが、社会学では感情移入や内観法には依拠しない。
- 6) 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー』新曜を参照。
- 7) 「分厚い記述」とは文化人類学者のクリフォード・ギアーツが広めた用語である。ここではインタビュー記録を解釈する際に、語りの字句を要約するだけでなく、語りの意味を語りの文脈に位置づけて解釈することを「分厚い記述」とみなす。
- 8) 会話分析を応用したインタビューの表記法については桜井を参照(桜井2002:177)。
- 9) 谷富夫編著, 2002, 『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房, p.544.

#### 文 献

- Flick, Uwe and Steinke, Ines (ed.), 2004, *A Companion to Qualitative Research*, Sage Publications.
- Grathoff, Richard Hrsg., 1985, *Alfred Schutz and Aron Gurwitsch Briefwechsel 1939-1959*, Wilhelm Fink Verlag. (=1996, 佐藤嘉一訳『亡命の哲学者たち—アルフレッド・シュッツ／アロン・ゲールヴィッチ往復書簡 1939～1959』木鐸社)
- 片桐雅隆, 1993, 『シュッツの社会学』いなほ書房
- 中村文哉, 1998, 「社会的行為とレリヴァンス: レリヴァンス概念の原像と射程」, 西原・張江・井手・佐野編『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房
- Schütz, Alfred [1932] 2004, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, UVK Verlagsgesellschaft mbH. (=2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—理解社会学入門 改訳版』木鐸社)
- , 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, edited, annotated, and with an Introduction by Richard M. Zaner, Yale University. (=1996, 那須壽他訳『生活世界の構成—レリヴァンスの現象学』マルジュ社)
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 佐藤嘉一, 2004, 『「方法」としての人間と文化』ミネルヴァ書房
- Strauss, Anselm L. and Corbin, Juliet, 1998, *Basics of Qualitative Research 2nd ed.*, SAGE Publications.
- 矢田部圭介, 2000, 「<レリヴァンス>の系譜: フッサールからシュッツへ」『現代社会理論研究』10, pp.359-381.
- , 2002, 「二つの<レリヴァンス>: シュッツとエスノメソドロジー研究」『ソシオロジスト: 武蔵社会学論集』4 (1), pp.97-124.

(こんどう としお

佛教大学社会学部 准教授)